と〻思ふ。近く其の齢漸く傾いて何れの地でも他の民族の主權の下に、憫れな生活を續けて居るにすぎないのに、今また唯一つの賴みであつたオスマン土耳其の國も、無殘な最後に走りつゝあるやうである。異教徒を倒せの叫び聲もけふの世の中では思ひ切つて振ふことが出來ない。此の際サマルカンドの地下の一室濃き碧玉の棺の中に、靜かな眠りに入つて居るといふ昔の英雄を想ふものは、自分一人ではあるまい。

（新日本第三卷第一號、大正二年一月）